

## 御恩の重さ

「一、蓮如上人御膳まいり候ふ時には、御合掌ありて『如来聖人の御用にて衣食ふよ』と仰せられ候。」(御一代聞書)

「二。蓮如上人物を聞召し候ふにも、如来聖人の御恩にてましく候を御忘れなしと仰せられ候。一口聞召しても思召し出され候ふ由、仰せられ候ふと云々。」(同上)

「前々住上人は御門徒の進上物をば御衣の下にて御拝み候。又仏の物と思召し候へば御自身の召物までも御足に嘗り候へば御頂き候。御門徒の進上物即ち聖人よりの御與と思召し候ふ、と仰せられ候ふと云々。」(同上)

以上のようなお文は、御一代聞書には至るところに見ることが出来ます。蓮師の御日常の御合掌の生活を、明らかに知らせて頂くことが出来ます。

本仏に射する帰依の心、大悲本願に帰命する信心の眼は、同時に一切のものの御恩の上に開く眼でありました。太陽に向つて開かれたる眼は、一切万象に向つて開かれたる眼であるように。仏の光によつて開かれたる信心の眼は、衣食住の一切の上に開いて、御恩を拝ませずにはおかないのであります。

仏を応供と申します。 智度論には

「阿羅訶名二應受供養 仏諸結除盡得一切智慧故、

應受一切天地衆生供養 以是故仏名應供」

と言つてあります。

浄影は

「応供顕其滅極 証滅相應故名為應 又証滅故 合應供養故云應供」

と釈しております。これらによりますと、仏を応供と申すのは、仏は一切諸結即ち煩惱を滅し尽くして一切智慧を成就し、その智慧によつて証を成就していられ、その証と滅すなわち涅槃とが相応しているのが応であり、滅を証するが故に、衆生の供養に合応するのが応供であると言われるのであります。すると、煩惱を断じつくさず、涅槃の証を成就していないところの衆生には、一切衆生の供養に応ずる尊い心もないことが明かであります。煩惱のころがある間は、一切のものに好き嫌いをおこし、愛着貪愛や、憎悪等をおこすからであります。

すると、衆生が、供養を受けていないのでなく、又供養そのものが尊くないのではなくて、衆生のころそのものがいけないのであることがわかります。ここに考えなくてはならぬ多くの問題があるのではありますまいか。念仏のうちに深い内観に誘はれることでもあります。私どもは、食前食後に、合掌して、食前食後の言葉を唱へて、御恩に感謝して、食事を頂いてをります。それに対して、世間の念仏の道俗から非難を受けてをります。一番低調なところは「あんなことをしていたら熱いお汁も冷えてしまふではないか。光明団のものは、ああいふ行をせねば、お浄土にはまいられ

ぬと思うている。浄土真宗はこの身このまゝぢや」といいます。まさか私たちも、こうせねばお浄土に参られぬと思つてやつているのではありません。こうせねばとか、こうしさえすればとか、そうせなくてもとか、そんな言葉は、みな功利的な私の声であつて、浄土には関係しない我慢の心であります。

中には坊さんが「貴様は、あんな殊勝らしいことをしているが、まことに味の濃淡は問はんか、品の多少を選ぶ心はないか」と怒鳴り散らすのがあるそうであります。そう問いつめられると、私もまた相すまぬやつであります。まことに応供ならぬ煩惱のかたまりであります。お恥しいことであります。相済まぬことあります。

しかしながら、私は今、全く同胞の御供養、仏祖の御徳によつて、釈迦親鸞よりも、恵まれた生活の中に、何一つ徳のない奴が、世尊聖人の御徳に養われて生かされているのであります。

どうして合掌せずに頂けましょう。蓮如上人の御日常を拝するにつけても、どうして合掌せずに頂くことが出来ましょうぞ。たとえば、私の煩惱が何と吼えようと、御恩そのものに変わりはありません。

本部の台所には同胞の皆様からよく様々な御供養が送りとゞけられます。容易ならぬお心づかいであります。そのみ意のほどを承る時、一本の大根にも一袋の豆にも、一籠の菌にも、涙せずにはいられない尊いみ心、念仏のまごころからが御供養の中にこもっています。そのみ心を頂戴する時どうして合掌せずにいられようか。 2

それをそれとは知らないで頂いたものの中に、どれほどの尊いみ意がこもっていたか、それも知らずに、食い貪つたとしたらこれほど恐しいことがどこにありますか。そのことばかりくり返していることを感ずく時、与えられたものに合掌しないですよかろうか。

応供でもない、罪悪深い凡夫が食膳に向ふ時、合掌し御恩に感謝して頂戴することが、他の方に対して目ざわりになる嫌なことでありましょう。どうか許して頂きたい。今日の食膳にも、これを本部に、これを先生にと、長い間の思いで送られた大根が入っていることを思う時、それでないにしても、命をとつて食べていることを思う時、我には許せ、我にのみは許させたまえ、この合掌を。

合掌は世尊応供の道であると共に、凡夫最下の生きさせて頂く道でありました。内心の勝手な声は貪欲の声、この煩惱の声よりも、御恩の持つ重さは重い。御恩が合掌させて下さるのであつた。

(非常時、一切の物の重んぜられる時に當つて、仏の子としての道を思いつつこれを書く)